

日本仏教雑感

私の目にうつった日本仏教

哲学博士　　グルバクシュ・シン

黒田武志老師には、私は格別な関心を抱いている。六年前、来日して最初に知遇を得た一人である。老師には、さまざまな理由により、強い印象を受けた。その理由は、老師が、教主ブツダの教えを独特な方法をもって敷衍しておりその限られた方法をもって最大の効果と活動を展開している、私は思う。日本を訪れる諸外国の仏教学徒の間で、すでに老師の名声は高く広く知られている。そのみならず私はもっと個人的な理由から、老師に親近感を抱いている。

かつて、老師に会った際、会話の中に、前角博雄老師の名が出てきたのである。偶然ではあるが、日本に来た当初、私を知るようになったもう一人の偉大な老師、これが前角老師である。師は禅を通してアメリカ仏教興隆に生涯を捧げ、その生きざまを著書に残され、私はその生き方に傾倒していた。その前角老師が黒田武志老師の実兄であるを知って、なお一層黒田武志老師に親しみを感じるようになった。

そのご縁で『成寿』に一文を載せさせていた

だくことになり、以下の三、四点について、私
が日本の仏教に特に強く感じていることを述べ
てみたい。

日本の仏教はインドから、中国を経て釈迦入
滅約千年後に伝来している。その間、原始仏教
とはいささか違いが生じているように思う。ま
ず私の国の原始仏教では「肉食」と「飲酒」は、
特別な場合のみブツダによって許可された。こ
れはいつまでも、日常的には、決して正当化さ
れることはないのである。ここに、例外と規則
(戒律)の間に大きな相異があるのではないだ
ろうか。

私の理解する限りでは、日本の仏教徒は、自
分達の肉食と飲酒を正当化している。これは、
私はなんとも、受け入れることができない。こ
れらは、私にとっては、道理に叶っていないと
思うのである。

規則(戒律)は規則であるということを、忘



れるべきではない。若しも仏教の基本的な理念を修正しようとするならば、それは結局、我々が、我々のために規則を創った教主ブツダの智慧そのものを疑うことになるからである。

仏教徒が肉食を正当化する他の理由は、仏教僧が托鉢に廻る時、布施された凡ての物を受容しなければならぬと言う教えにもとずいていゝる。これは現実的ではない。

非暴力は、教主ブツダの我々に与えられた基本的理念の一つである。私の理解するところによれば、肉を食し、肉食を正当化すれば、ブツダの根本的な教説に従っていないことになる。つまりブツダによって与えられた偉大な普遍的規則を無視し、自らの人間的弱さに適合させているということにもなる。

日本の仏教徒たち、一般の僧や高位の僧たちも、「文化の相違」ということからその整合性を語ったとしても、これは核心から乖離している

と言わざるを得ない。このことは、私にとつて、仏教の規範の限られた理解に基づいた自らの観点からのものであり、私の正直な見解として発言してみたいと思うのである。いまだ大乘仏教を充分承知しない私の見解は誤っているかも知れないが、このことは私が感じていることなのである。

いまひとつ私に取り上げたいと思う問題は、瞑想についてである。瞑想は仏教の中心的な問題であり異論はない。また瞑想は核心的なものでそれはブツダの教説の真髄でもある。私は偉大な仏教者である道元の著作を読んで、非常に感銘を受けた。道元の坐禅の重視は、驚くべきものである。『正法眼蔵』の各ページは坐禅を重要なものと説いている。道元の坐禅中心の生活は、信奉者たちの模範である。

しかしながら、現代日本において仏教徒は、瞑想の重要性を強調はしても、仏陀が強調した

ような仏教徒の実践の中心ではなくなってしまう
たようである。瞑想はより形式化し、日常的な
生活と実践にはつなげていない。今日出会っ
た日本の仏教者は、瞑想が中心的なものである
必要性を異口同音に述べている。しかしこれも
或る意味で不思議な感じがする。いつの時代で
も瞑想は、仏教者の生活の中心となるべきだと
思う。

また多くの人々の生活となつて欲しいもので
ある。

いまひとつ、日本の同朋としての仏教者たち
は、インドにおける仏教の現状に対する知識が
欠如しているように思う。ある時代を境にして、
インドには仏教徒はいないと日本の歴史家は言
う。これは真実ではない。

私の立場から見れば、インドの仏教は、人々
の生活の中に、伝統的存在、生活の方法、完全
なるエトスとなつて取り込まれ脈々と生きてお

り、仏教が「思想体系」「思想構造」「世界観」
として、いまでもインド人の生活において力強
く生きていたのである。従つてインド人の総合
的知恵や公衆の庶民の知恵の一部分なのである。
人々はこれらの知恵の根源に気がつかないかも
知れない。しかし、それを気づかずに実行して
いることも事実である。インド人のもつ精神の
美しさは、この柔軟性にある。この知恵を仏教
とかヒンズーの枠組に入れて区分化することは
困難であり、広い意味の宗教として、信仰し実
践していると理解するのが正しいと思う。これ
らのいずれの標準的なものもすべてブツダにさ
かのぼることができるのである。そしてそれら
は自然に吸収されて価値となり、文化的資産と
なっている。これは、民衆の生活のパターンを
形成して、真実の価値となっている。そしてつ
いでに述べればこれら文化資産の上部構造は、
言語なのである。教主ブツダの用いた言語は教

訓として多く採用され、インドにおいて、民衆を陶冶し今なお生きた力を有している。「ブッディ」の如き語や、教主ブツダの聖なる生活について記述する聖人伝の如きもそれである。「ヴィパッサナー」（止観）の如きは、インドのインテリゲンチャーの間では、最もポピュラーなことからである。それ故にインドの仏教は生きており、まさにインドの宗教であり、インドの文化的、精神的遺産であることは言うまでもない。

教主ブツダを生んだ大地は、その後も、なおその豊かさを失ってはいない。ブツダは偉大な大地に永遠に生き続けている。日本人の精神的構造から定義される如き意味の仏教は、確かにインドに存在しないかも知れない。しかしながら、菩薩行はなお、ブツダの終熄せざる務めとして継続しつづけているのである。もし我々がその地を觀ようという純粹な関心を持っていくならば、我々は眼を見開かなければならない。

時間的、空間的な両面から、私が挙げた重要な事柄について、以上概観してみたのである。

（翻訳・文責 福田孝雄）

